

韓半島新石器時代の初期農耕の検討

— 中西部地域の石鏃と石器組成の分析を中心に —

金 姓 旭

はじめに

韓半島の初期農耕に対しては近年活発な議論がみられるが、韓半島の農耕がいつ始まったのか、どのような形態であったのか、その農耕はどのような拡散過程によって広がったのかなど、いまだに様々な問題があり統一した結論を得ていない。それは、農耕の在り方を実証する栽培植物に関する資料や畑・水田などの耕作遺構がなかなか発見できないからである。しかしこのような証拠資料が出土しないからと言って農耕が存在しなかったとは断定できないであろう。従って本論では、近年韓半島西海南部内陸部の発掘により増加した多様な遺物を農耕という観点から検討する。

1. 問題提起

1.1 研究史・研究目的

韓半島の先史時代農耕は韓国の研究者だけではなく、日本列島における農耕の起源や伝播過程を明らかにするための研究の一環として日本の研究者によってもしばしば研究の対象とされてきた。そして、研究の方法においても多様な試みがあった。

韓半島初期農耕の研究において1990年代末までは日本の甲元眞之、韓国の安承模という二人の研究者が主流になる。先に、石製耕具の検討によってその在り方を明らかにしようとする研究が、甲元によって行われた。甲元は、先史時代においては同一の器具を多目的用途に使用する可能性が高いため、農耕の存在とその形態を論じるには農耕生産から消費されるまでの諸過程に使用される道具を指摘する必要があるとした。その上でそれらの過程で使用される器具の組み合わせに応じて農耕を類型化している(甲元1973)。甲元が設定した農耕生産を制約する生態的条件を捉えて得られた地域性に関しては今日においても大筋で認められている。しかし設定された初期農耕の類型が地域性を反映しているとしても対象とした新石器時代中期頃から青銅器時代中期頃にわたる長い期間の推移を表した点に問題がある。

その後、韓国では池健吉・安承模によって、遺跡から出土した穀物資料や農耕具の総合的考察が行われた(池健吉・安承模1983)。穀物資料を伴う研究としては評価できるが、農耕具との関連性を論じるまでには至っていない。農耕具の場合、特に石包丁についてもっとも詳細に扱っているが、分類とは関係せず、全体的な農耕具の変化にあわせて農耕の変化を説明することにとどまっている。このような農耕具を通じた研究は80年代末まで続き、東アジアの農耕という観点により韓半島農耕の研究が行われた(安承模1987・甲元1989)。しかし90年代からはそれまで農耕具として認められていた石器について科学的検証や検討が行われずに使われたことが批判され、農耕の存在をより明確に証明で

きる栽培穀物資料中心の研究（安承模1994・甲元1999）が行われた。また経済の発展とともに発掘調査が増加し、2000年代以後過去の調査報告書が刊行されるようになり、韓国新石器時代の研究活動はより活発に行われるようになった。農耕の研究においても、石器組成や植物遺存体による研究や理論的考察を通じて韓半島の初期農耕の在り方や農耕の広がりを探る研究は続いている。その中で林尚澤は、各石器の分類を行い、時期別の石器組成を整理することによって、韓半島の中西部と遼東・遼西地域の比較を試みた（林尚澤2001）。しかし石器の機能を反映するものとして形態のみを挙げ、分類を行った点に問題がある。

宮本一夫は、朝鮮半島における農耕化を検討する際、雑穀農耕と稲作農耕の出現とを分けて述べている（宮本2003）。朝鮮有文土器の編年（宮本1985）を基軸に土器様式の変化が西朝鮮を元に拡散していく現象を捉えた。雑穀農耕において石鋤・磨盤・磨棒はアワ・キビを中心とする栽培植物に伴う華北型農耕石器で、遼東の特徴的な柳葉形磨製石鏃とともに西朝鮮を中心に拡散していくことを把握している。これは雑穀農耕文化が遼東を経由して西朝鮮へ伝播したことを示し、西朝鮮的な櫛目文土器様式と華北型石器様式の拡散に伴い、朝鮮半島南海岸地域にまで達したと論じている。稲作農耕についてはコメが単体で華北の雑穀農耕社会に雑穀の一種として生態的な自然の流れの中で伝播し、韓半島新石器時代のコメ関連資料から見て、紀元前2000年頃には漢江下流域に栽培イネが伝播していた可能性が高いと述べている。宮本が想定している雑穀農耕の伝播ルートは大きく間違っていないだろうが、遺跡や遺物の具体的な検討がないまま全体的な流れを述べている（宮本2003）。例えば、遼東で華北型農耕石器に伴う、「擦り切り技法によって加工された」と述べた「柳葉形磨製石鏃」については、その製作技法や柳葉形として一括した磨製石鏃のより詳細な検討が必要であろう。

以上のように、農耕の在り方や広がりを明らかにするためには、より具体的な資料検討が必要であることが分かる。従って、農耕を定義した上で、農耕に直接関連する道具やそれ以外の道具の広がり、または道具を製作する技術・技法などの広がりを、より具体的に検討することによって、韓半島新石器時代の農耕を明確にすることができるだろう。

1.2 初期農耕の定義

農耕について論じる前に「初期農耕」の定義を明確にしておきたい。初期農耕や農耕について先学の定義を見てみると、甲元は、定型化した農耕について考える際、「初期農耕」は蓄力による耕作以前を示し、時期的には、楽浪統治下では牛耕の存在が考えられるので、それ以前の農耕として定義している（甲元1973）。李賢恵は初期農耕段階＝原始農耕段階で、農耕具の全てを石製の道具に依存し、焼畑農耕（slash and burn）と呼ばれる原始段階の農耕方式を行った紀元前3000年期以来の新石器時代の雑穀農耕を称している（李賢恵1998）。大貫静夫は極東の農耕を雑穀畑作農耕と認め、雑穀の「雑」はコメより下等だという響きがあることから、アワやキビなどが栽培された時期として定義している（大貫1998）。李俊貞は農耕への転移過程を論ずる際に、栽培種化（domestication）、耕作（cultivation）、農耕（agriculture）の概念規定が必要であり、栽培種化（domestication）は、野生の植物が人間の介入によって移転的形質と外形的形態に変化を引き起こして新しい種に変貌する生物学的過程を意味し、耕作（cultivation）は、野生種であれ栽培種であれ関係なく特定植物群の生長環境をつくりだす（造作する）人間の文化的行為であり、農耕（agriculture）は、生計の全部またはほとんどを栽培植物に依存する生産経済体系であると概念を規定している（李俊貞2001）。

このように初期農耕の概念化が行われているが、甲元の「蓄力による耕作の以前」については「蓄

力」を想定するのに動物（牛、馬など）の骨や動物に引っ掛けた道具が遺跡から発見されないかぎり、蓄力の存在については証明しにくい。しかし農耕が本格化したと言われている韓半島の青銅器時代にも蓄力の証拠は乏しいという問題点がある。そして李賢恵の概念規定による場合、農耕具のほとんどが石製品であると述べているが、角・歯・貝殻製の耕具も発見されており、馬山里遺跡の住居跡からは包丁と推定される木製品が出土したことから木製耕具の存在も排除することはできない。さらに焼畑農耕（slash and burn）についてはいまだ明らかになっていないので、初期農耕を定義するには適当ではないように思われる。李俊貞の三つの用語はよく概念規定できているが、考古遺物をどのようにこの概念規定に対応させるかという問題点がある。

そこで本稿では、農耕の存在が想定される韓半島新石器時代遺跡の中で、時期が最も遡ると考えられる智塔里Ⅱ地区（朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所1961）の農耕具と特徴的な石器を基準として、初期農耕の定義を行う。智塔里Ⅱ地区では、2号住居址の土器の中から炭化したアワ（あるいはヒエ）のような穀物資料が発見され、前段階では見られなかった楕円形の石器・鎌形石器とともに、鞍形の磨盤や磨棒などの多様な石器が出土している。このような石器は農耕という観点から見ると耕起具、収穫具、加工具として認められ、農耕に関するすべての道具が出揃ったということが出来る。さらに、この時期を境に韓半島に広がる特徴的な石鏃がある。基部を製作する方法において、石鏃の長軸方向に表裏を研磨することによって、基部の両突起を作る凹基磨製石鏃がそれである。

従って本論では、楕円形の耕起具・鎌形の収穫具・磨盤と磨棒の植物質食料加工具を利用したアワ（あるいはヒエ）のような雑穀農耕に凹基磨製石鏃が伴うという石器組成を持つことが智塔里遺跡Ⅱ地区のような初期農耕を表すものとする。

2. 中西部地域の土器編年

まず石鏃や石器組成の分析に入る前に本論における時期区分について述べる。時期区分についてはこれまでの編年研究によって得られた土器編年を基準にする。

韓半島中西部地域の土器編年研究を進展させたのは韓永熙であった。韓永熙は矢島貝塚と岩寺洞遺跡の発掘成果に基づいて口縁部、胴体部、底部にとともに異なる文様が施される岩寺洞の三部位区分文系土器から、矢島の同一系土器への変化を想定するようになる（韓永熙1978）。これにより、引き続き中西部地域の土器研究は多くの進展がみられるようになる。しかし80年代末から漸次的に増加する発掘の成果で、後期を代表する土器が岩寺洞式の区分文系文様とともに共伴する様相を呈しつつ、既存の編年では論理的に説明できない状況となった。

このような状況を打開するために既存の成果に新しい資料を追加して編年を細分化する試みが始まった。典型的な三部位区分系土器を前期前半に、短斜線文系の口縁部文様の下に従属文が追加される土器を前期後半、底部を除いた全面に魚骨文を荒く施す矢島式土器を中期、全面横走魚骨文と口縁部文様だけが残る段階を後期、という細分化した編年が韓永熙によって設定される（韓永熙1996）。一方、田中聰一は韓永熙の中期設定とは違い、口縁部従属文が消滅し、二部位文様構成が成り立つ段階を中期に設定している（田中2000）。また林尚澤は、90年代末まで具体的な土器変化様相に対してほとんど知られていなかった西海岸地域の土器様相について、新しい資料の分析を通じて中期まで遡る可能性を提示している。さらに、西海岸地域土器で認識されている短斜線文系の文様様式と器形

(錦江流域)は漢江流域の岩寺洞系土器よりは、弓山里、智塔里系の西北地方と類似していることが分かった。

これまでの土器研究を総合して中西部地域の土器編年を具体的にまとめると、前期は三部位区分系土器が出現する時期とすることができる。口縁部に短斜集線文あるいは刺突点列文、胴体部に縦走魚骨文、底部に平行斜線文あるいは横走魚骨文を基本にする。前期後半から中期前半には口縁部従属文帯が付加される。中期において、より明確に特定できるのは二部位文様の成立である。口縁部従属文帯が消滅し、口縁部文様帯と胴部として二つに文様が分けられる。さらに西海岸地域と錦江流域では短斜線文系の文様様式である菱形集線文、広幅菱形押引文(錦江式土器)、器形では壺型土器が中心になる。後期は全面横走魚骨文と口縁部文様だけが残る。この時期には地域性が認められるが、大同江流域では全面横走魚骨文が基本になり、漢江・京畿湾流域は短い短斜線文あるいは横走魚骨文が口縁部に施される。錦江流域は荒く施された全面横走魚骨文と、口縁から離れて文様を施す、いわゆる鳳溪里式土器が出現することで、中西部地域の土器編年を組み立てることができる。

3. 石鏃の分類

石鏃是新石器時代全般に使用された道具として、その分類によって時間的・空間的な推移をうかがうことができる遺物の一つである。石鏃の分類に関しては、石器組成を通じた研究であるにもかかわらず、本稿の第2章で述べたように、土器の編年をそのまま受け入れてもよいのかという問題を検証することが可能であろう。ここで石鏃の分類の必要性を示すのは、石鏃の特徴的な類型の分布を検討することによって、石鏃に伴う文化の推移をうかがうことができるためである。

中西部地域の新石器時代に出土する石鏃のほとんどは磨製石鏃である。ここで行う石鏃の分類は基部の形態と基部を作る技法に着目し、大分類としてその源流を異にすると考えられる基部の形態を凹基と平基に分けるものである。

3.1 凹基磨製石鏃の型式分類

凹基磨製石鏃の型式分類において、注目すべきは凹基石鏃の凹みの作り方である。石鏃の長軸方向に表裏を各々研磨して基部の両突起を作る方法で、中西部地域に特徴的に見られる凹基磨製石鏃の基部製作技法として捉えられる。基部の湾入の程度(図1)によって、基部幅の1/3以上が湾入する

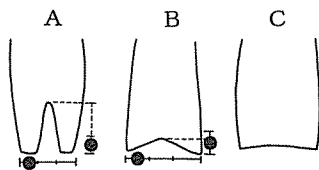


図1 凹基鏃の基部湾入度

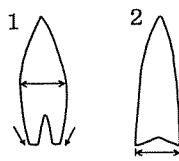


図2 凹基鏃の平面形態

A、基部幅の1/3以下が湾入し角があるB、緩く湾入し角がないCに分けられる。平面形態(図2)によって、身部の中央部あたりが最大幅であり、それから基部に近づくほど幅が縮小する1と、身部の最大幅が基部である2

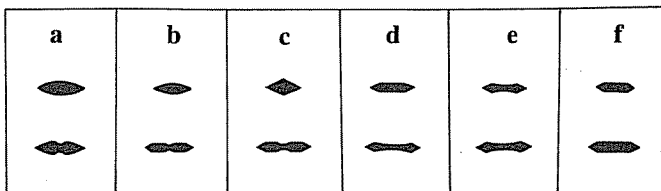


図3 凹基鏃の断面形態

に分けられる。断面形態(図3)によって、楕円形の身部に中央部が凹んだ基部断面を持つa、楕円形の身部に中央部が凹み、刃部と凹んだ基部の間に面を持つb、菱形の身部に中央部が凹み、刃部と凹んだ基部の間に面を持

つc、六角形の身部に中央部が緩やかに凹んだ六角形の基部断面を持つd、身部と基部の全ての中央部が緩やかに凹んだ六角形断面を持つe、身部と基部の断面が全て六角形であるfに分けられる。

表1 凹基鏃の基部と平面との関係

	A	B	C
1	○		○
2	○	○	○

表2 凹基鏃の基部・平面形態と断面形態との関係

	A1	A2	B2	C1	C2
a	○				
b	○	○			
c		○	○	○	
d	○	○	○	○	○
e			○		○
f					○

先に、基部の形態と平面形態との関係(表1)をみると、基部形態Aは平面形態1と2が対応し、Bは2、Cは1と2が対応することが分かる。従って、凹基鏃には基部の形態と平面形態からA1、A2、B2、C1、C2が存在することが分かる。また断面形態との関係をみると表2のようになる。A1は断面形態a・b・dに対応し、A2はb・c・dに、B2はc・d・eに、C1はc・d、C2はd・e・fに対応することが分かる。

このような分類によって、遺跡から出土する石鏃を検討してみよう。大同江流域の智塔里Ⅱ地区住居跡(朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所1961)からA1a・A2bが、それより少し遅い時期であるI地区堆積層からはA1a・A1b・A2b・A2cが出土している。漢江流域の岩寺洞Ⅰ(中央博物館、1994)と連川三巨里(宋満榮他2002)からはA1aの石鏃が出土している。中西部地域土器編年によると全て前期

に位置づけられる遺跡である。中期以降に編年される遺跡からはA2cを含めた型式の石鏃が出土する。この中でA2cは中期に編年される弓山遺跡3期(朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所1957)によくみられる型式であり、B2c・B2d・C1dは、李永徳によると、ノレ島遺跡(崔奎奎他2002)の前期後半～中期前半頃に当たる1群土器と伴って出土する型式である(李永徳2001)。その他の型式は中期から後期にかけての土器と伴う場合が多いが、明確に中期と後期には分

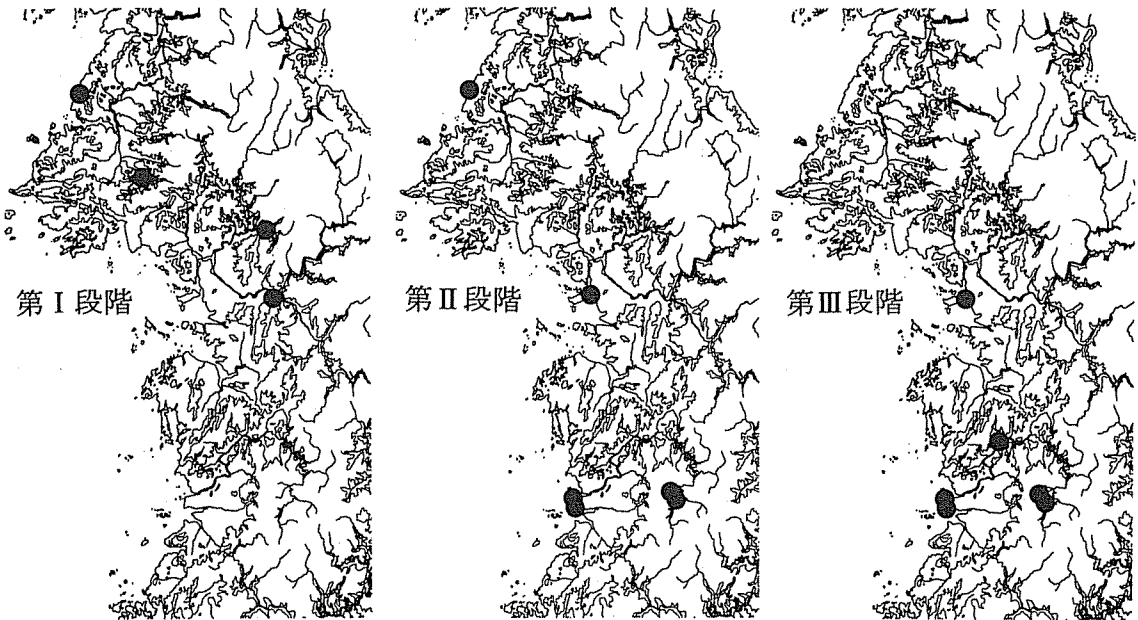


図4 凹基鏃の各段階における分布

け難い。しかし中期から後期にかけての遺跡からはノレ島遺跡1群で見られる石鏃も出土しており、石鏃の型式学的変化をうかがってみると、ノレ島遺跡1群に当たる石鏃型式を除いたほとんどの石鏃型式はノレ島遺跡1群に後出する時期であり、中期後半から後期に位置付けても問題はないと考えられる。従って、基部Cと断面形態d・e・fは、ノレ島遺跡1群の次に繋がる型式として認められる。

各遺跡の土器編年を基に、凹基磨製石鏃の変化をまとめてみると、基部・断面の形態はA→B・C→Cへの変化が、断面形態はa(b・c)→c・d→d・e・fへの変化が認められ、大きく三つの段階に設定することができる。A1a・A1b・A2b・A2cに当たる第I段階(前期)、A2c・A2d・A1d・B2c・B2d・C1c・C1dに当たる第II段階(中期前半)、B2d・B2c・C1d・C1e・C2d~fに当たる第III段階(中期後半から後期)として段階設定が可能である。

3.2 平基磨製石鏃の分類

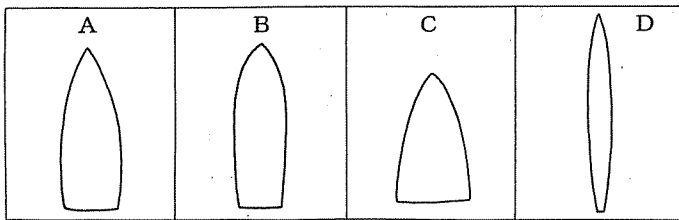


図5 平基鏃の平面形態

平面形態(図5)によって、鏃の身部中央部が最大幅を呈するA、鏃の基部が最大幅を呈し先端に向うに伴って幅が狭くなるB、基部が最大幅である三角鏃のC、細長い形の柳葉形のDに分けられる。断面形態によ

表3 平基鏃の平面形態と断面形態の関係

	A	B	C	D
1	○	○	○	○
2		○		
3				○

って、六角形1、中央部が凹んだ六角形2、楕円形3に分けられる。表3に従って平基鏃はほとんどが断面六角形の1と対応し、B2とD3が異なる断面を呈する。このように平基鏃は断面形態よりも平面形態が特徴的である。各々を遺跡と照らし合わせてみると、凹基磨製石鏃に比べて地域の特徴を持つことが分かる。A1は智塔里I地区1号住居地(朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所

1961)で出土したことによって前期まで遡る型式として認めることができる。B1は漢江流域の中期後半に編年される遺跡でよく見られる型式であり、B2は西海岸遺跡でよく見られる型式である。C1は西海岸・西海内陸部遺跡でよく見られ、割れた石槍を再加工したようなものもある。D1とD3は大同江流域の遺跡の中で中期以後に編年される遺跡でよく見られる型式である。西浦項遺跡第2期(金用珩他1972)から出土している柳葉形石鏃と類似することから大同江流域の中期以後は東北地域との関連性について考えてみるべき資料である。

3.3 小結

以上をふまえ石鏃の時間的・空間的推移をみてみると、前期には大同江流域と漢江流域において凹基A1a型式の石鏃を使用していることが分かり、大同江流域は凹基A1aの他に凹基A1b・A2b・A2cが出土し、漢江流域の遺跡よりも多様な石鏃型式を持っていることが分かる。中期になると第II段階の多様な石鏃型式が西海岸・西海内陸・京畿湾地域によく見られ、大同江流域では、凹基A2cと平基Dの柳葉形石鏃の中でも短いものが主流になる。中期後半の漢江流域では平基B1が中心になり、凹基石鏃はほとんど見られなくなる。中期後半から後期にかけの時期の西海岸・西海内陸・京畿湾地域は凹基石鏃の基部が次第に緩やかになる。また断面形態においては、凹み徐徐になくなり扁平な形に向う傾向を示す。大同江流域の金灘里第二文化層(朝鮮民主主義人民共和国科学院

考古学民俗学研究所1964) では断面六角形の細長い柳葉形石鏃が中心となり、南京遺跡の31号住居地(金用珥他1984)からは平基Cと認められる石鏃が出土する。

このように前期には、大同江流域と漢江流域が凹基A 1 a型式を使用する。中期になると大同江流域、漢江流域、西海岸・西海内陸部という三つに分けられ、前期の大同江流域と漢江流域で見られた石鏃の伝統は西海岸・西海内陸部(錦江流域)だけに残る。

4. 石器組成の分析

4.1 石器組成

生業活動を明らかにするためには、生業を行う諸行為にはどのような生業道具(石器・骨角器など)が対応しているかを分析する必要がある(小林1974)。生業活動に使われる道具は機能や用途によって狩猟活動に関する道具(以下、狩猟具)、漁撈活動に関する道具(以下、漁撈具)、樹木の伐採・加工に関する道具(以下、樹木の伐採・加工具)、植物質食料採集・加工に関する道具(以下、

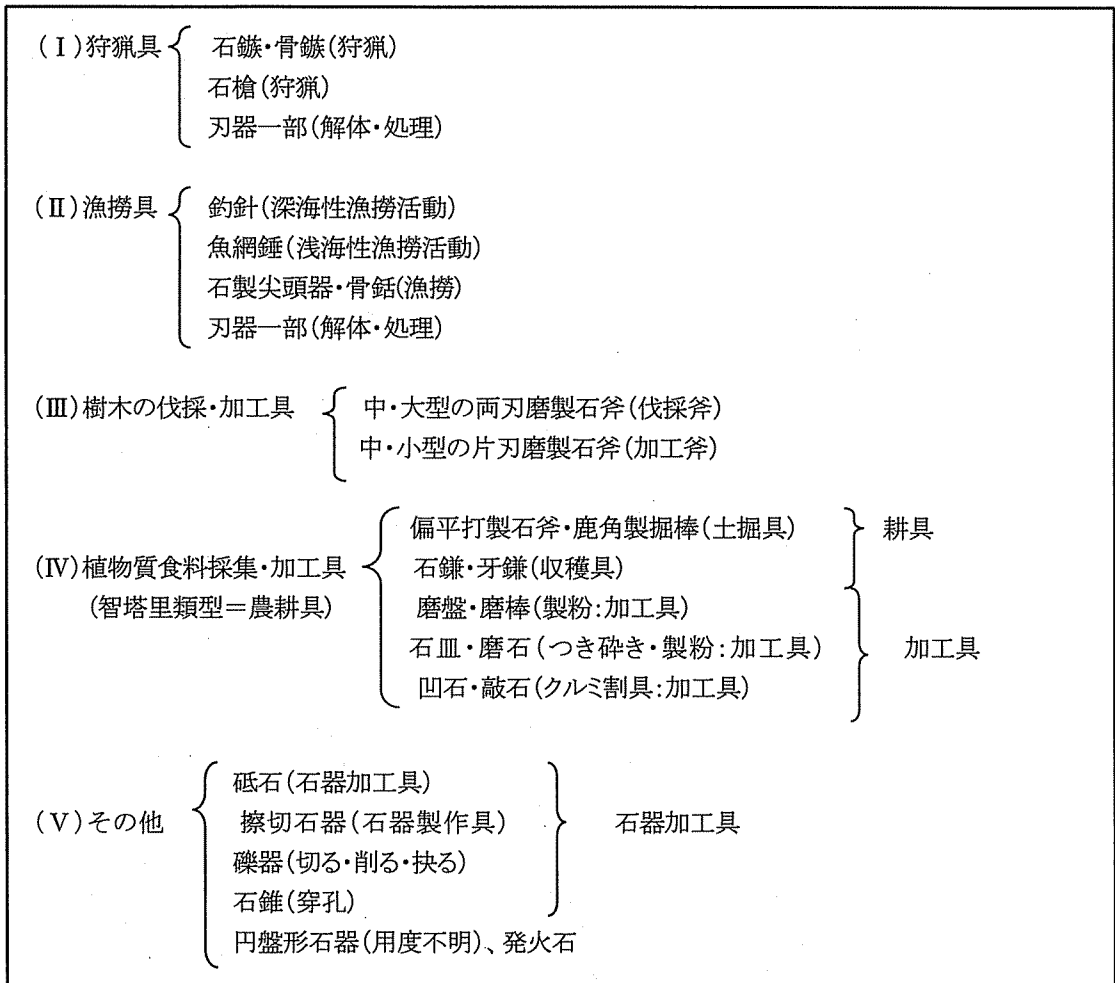


図6 石器の機能別分類

植物質食料採集・加工具)に分けることができる。このように石器を生業活動の目的ごとにひとまとまりにしたものが石器組成である(小林康男1974)。従って、石器組成の分析において、農耕に関する道具の推移を把握することによって、初期農耕の実体を明確にすることが出来るだろう。本稿では農耕に関する道具を智塔里Ⅱ地区でよくみられる土掘具・鎌・磨盤・磨棒と呼称する。

本稿においては、諸生業活動の道具をその機能や用途によって整理し、図6の概念図のようにまとめる。

4.2 石器組成の遺跡検討

遺跡をその立地環境と性格別に地域群を設定し、地域群の各遺跡から出土した石器類(骨角器も含む)に焦点をあて、時期的変化にともなう石器の組成率を検討する(図7)。中西部地域は、大きい川を中心に内陸部に立地する大同江流域遺跡群・漢江流域遺跡群・錦江流域遺跡群と西海岸・西海島嶼地域である京畿湾遺跡群・錦江河口遺跡群に分けることが出来る。検討遺跡の選択においては、広範囲に発掘された集落で、多くの石器類を出土した同一時期の遺跡を比較していくことが最も適切であろう。しかし現在韓国で発掘された新石器時代の遺跡を見ると、集落遺跡より包含層の検出例が多い。また、広い時期にかけての遺物が混在しており、調査面積が狭く、遺物の出土量も少ない状況である。従って、その機能と用途を異にする二つ以上の石器の組み合わせを持ち、石器(又は骨角器)が5点以上出土する遺跡のみを選んで石器組成の推移を検討する。そして少量の石器が出土する遺跡

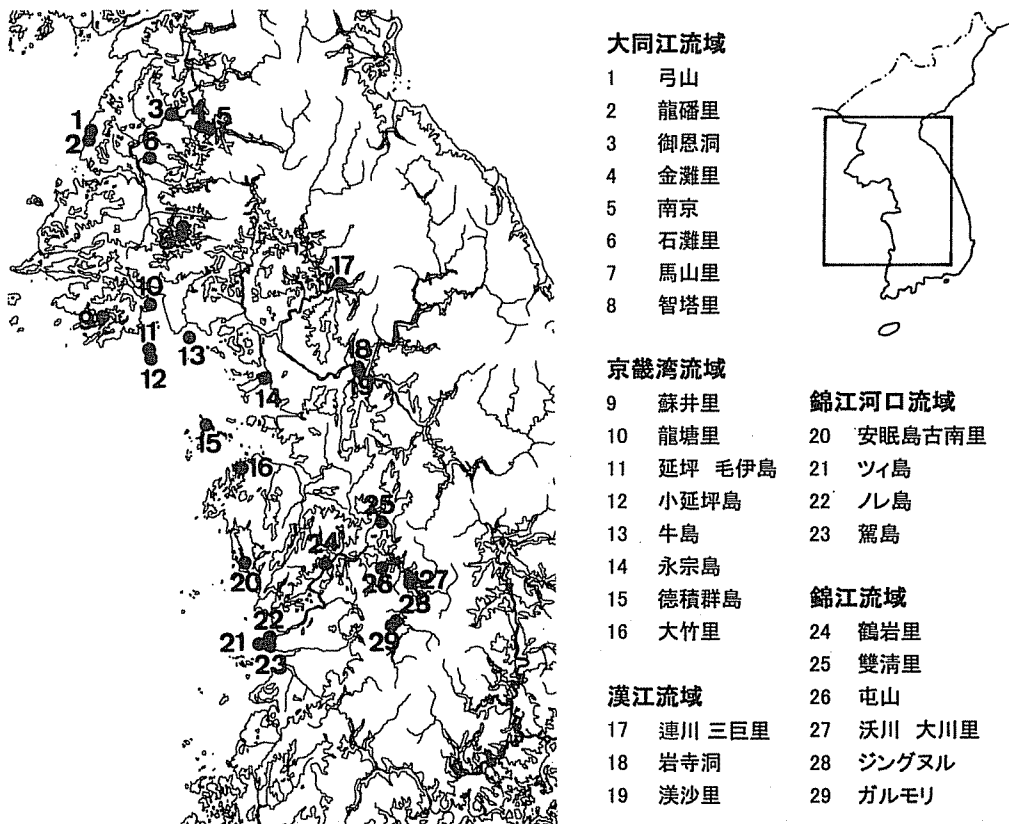


図7 中西部地域の重要遺跡分布と遺跡群

の場合は、同地域・同時代・同性格と推定できる他遺跡の石器類と比較・検討することによって信頼度を高めることとする（酒井1986）。

なお、遺物を数える際、漁網錘はいくつかの錘を組み合わせる使用の道具であるので、漁網錘1点を他の道具1点と同じ単位で扱ってはならない。しかし、西浦項遺跡の3号・9号・19号・23号住居跡の中からは魚網錘が各々12点・13点・10点・9点出土し（金用珩他1972）、地境里遺跡のS-4号住居跡の生活面からは魚網錘15点が一ヶ所に密集して出土している（白弘基他2002）。それは、一つの魚網を使用した後、住居地や生活面に置いたものであり、有機物で作られた網はなくなり、最後に魚網錘だけが残ったためであると考えられる。しかし、南京遺跡のように600個から650個が集まって出土する例もある。この場合、10～15個で作った魚網の何十倍も漁獲量が増えるはずである。従って、本稿ではそのまま10～15個を魚網の最小単位として捉える。

4.2.1 大同江流域遺跡群（図8）

ここで扱う遺跡は大河川の川辺に立地している集落遺跡である。前期の遺跡としては、典型的な三部位文様土器が出土する智塔里1号住居跡と口縁部従属土器が出土する智塔里2・3号住居跡が該当する。智塔里1号住居跡からは耕具を除いた生業諸過程の石器がすべて出土している。これに少し遅れる2・3号住居跡からは1号住居跡の多様な石器組成に大量の耕具が加えられる様相を呈している。中期には、文様帯を成しながら土器の全面に様々な文様を配合配置した土器が出土している金灘里遺跡の第1文化層（朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所1964）がある。前時期より石器の数が減少しており、その中でも耕具の出土率がかなり減少している。代わりに、植物質食料加工具の比率は高くなっている。南京遺跡の1期（金用珩他1984）は、金灘里遺跡の第1文化層の文様帯区画という伝統を守りつつ、全面に同一文を施す土器が出土していることから、中期後半に位置付けられている。ここでは漁撈具の比率が高くなっていることが認められる。後期には、土器の全面に同じく魚骨文を施している土器が出土する金灘里遺跡の第2文化層と南京遺跡の2期（金用珩他1984）がある。両遺跡とも漁撈具の占める比率が50%を超えている。しかし、樹木伐採・加工具や植物質食料加工具は相変わらず一定量出土しており、南京2期の31号住居地からは多量のアワが出土し

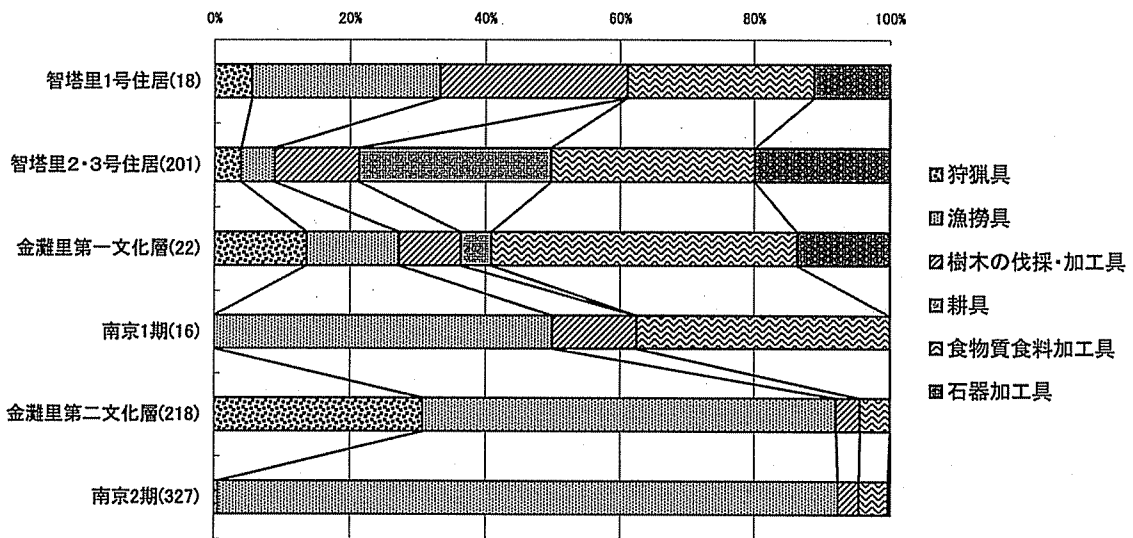


図8 大同江流域の石器組成

ている。

大同江流域遺跡群の全体的な様相をまとめると、前期後半には栽培植物資料に伴って農耕に関する道具が揃う。中期になると、耕具の出土率が減少し、後期には出土しなくなる。

4.2.2 漢江流域遺跡群 (図9)

三遺跡とも大河川流域の沖積台地上に立地する集落遺跡である。岩寺洞 I 遺跡と連川三巨里遺跡の住居跡からは三部位区分系土器と口縁部従属文帯を付加した土器が出土しており、前期とされる遺跡である。両遺跡は生業全般における多様な石器組成を表しており、その中でも植物質食料加工具の割合が40%を超えている。口縁部従属文帯が加えられている土器や二部位文様土器が出土している中期の岩寺洞 II 遺跡 (尹炯元他1999) では、石器の出土量が少なく、耕具が出土しなくなる。また今回の例には挙げてないが漢沙里遺跡をみると、同じく石器の出土量が少なく、岩寺洞 II とほぼ同じ様相を呈している。

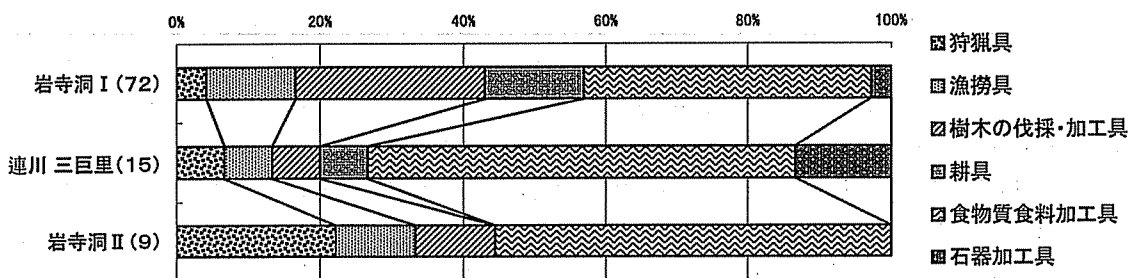


図9 漢江流域の石器組成

4.2.3 錦江流域遺跡群 (図10)

錦江の最上流地域に形成された沖積台地に立地する遺跡と錦江流域の丘陵に立地する住居遺跡で分けられる。沖積台地にあるジングヌル遺跡とガルモリ遺跡は土器の型式からみると、中期前半から後期の長い期間にかけて形成されたことがわかる。耕具が40%、狩猟具が20%以上の高い割合を示し、

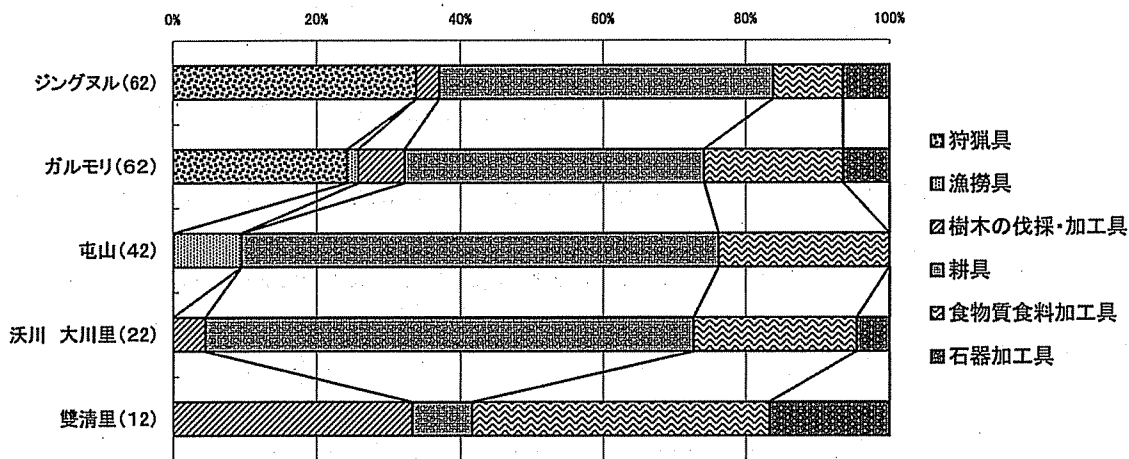


図10 錦江流域の石器組成

植物質食料加工具も10~20%を占めているが、漁撈具はほとんどみられない。丘陵上に形成されている、中期後半から後期の屯山遺跡（李康承他1995）・沃川大川里遺跡（韓昌均他2003）・雙清里遺跡（申鍾煥1993）も、ほぼ同じような傾向がみられるが、狩猟具は出土していないという差異が認められる。錦江流域遺跡の中で最も高い割合を示す耕具は、楕円形の土掘具であり収穫具はあまり見られないが、屯山遺跡からはイノシシの牙の片側を研磨して作った牙鏃が出土している。樹木伐採・加工具は少ない傾向になる。

4.2.4 京畿湾遺跡群（図11）

京畿湾の島嶼地域に形成されている貝塚遺跡である。陸地から近い永宗島遺跡は中期から後期にかけての遺跡である。狩猟具・植物質食料加工具・石器加工具だけが出土している。狩猟具の石鏃や石器加工具の砥石が多いことから、磨製石鏃を製作するための遺跡ではないかと考えられる。これに比べて、外海に形成された小延坪島遺跡（尹根一他2002）と延坪毛伊島遺跡（李相俊他2003）は漁撈具が80%以上の割合を示しており、植物質食料加工具や石器加工具は少量出土している。

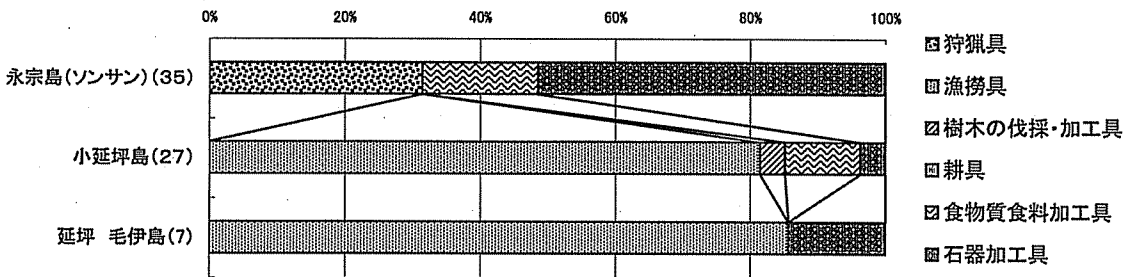


図11 京畿湾の石器組成

4.2.5 錦江河口域遺跡群（図12）

錦江河口汽水域に形成されている貝塚遺跡である。駕島遺跡（朴淳發他2001）については中期と認められる10層から8層までの石器が出土しており、生業の全般にかかわる多様な石器組成を成している。屯山遺跡で発見された収穫具と類似した牙鏃が出土している。ノレ島遺跡では短斜線文系土器や文様が荒く施された全面横走魚骨文土器などが出土しており、中期後半から後期に認められる。駕島遺跡より耕具の割合が高いが、ほとんど駕島遺跡と同じ石器組成を成している。

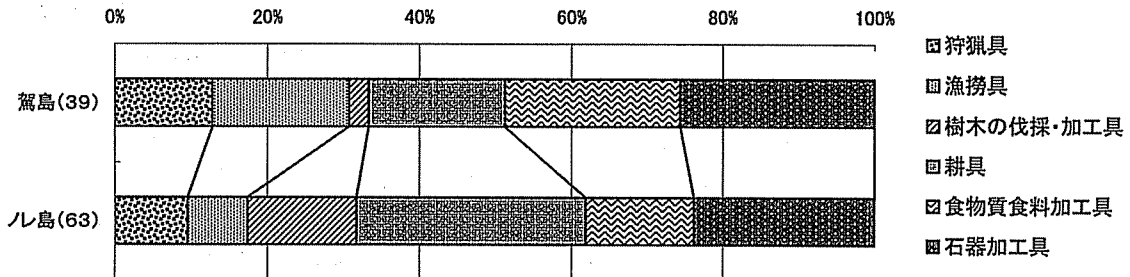


図12 錦江河口域の石器組成

5. 中西部地域の初期農耕の拡散と変化

以上から、石鏃と石器組成分析を通じて、中西部地域での農耕の広がりを検討したい。中西部地域の前期においては、大同江流域の智塔里Ⅱ地区2・3号住居跡で擦り切り技法で作られた凹基磨製石鏃第Ⅰ段階類型に伴って、耕具や植物質食料加工具という農耕に関する道具や穀物資料が備えられる。これを始めとして、漢江流域においても凹基磨製石鏃第Ⅰ段階類型と農耕具が備えられる。中期に入ると、前期には見られなかった錦江及び錦江河口流域にも擦り切り技法で作られた凹基磨製石鏃第Ⅱ段階類型と農耕具が出現する。このような傾向は後期にも続き、凹基磨製石鏃は第Ⅲ段階類型に変わる様相を呈する。

より具体的に述べると、前期の大同江流域と漢江流域における初期農耕の広がりについて現段階の資料からでは、大同江流域から漢江流域に広がったとは言い難い。ただ、前期に大同江流域と漢江流域の両地域において智塔里類型の初期農耕が行われていたことは明確である。しかし、中期から後期の錦江流域で見られる、錦江式土器と呼ばれている短斜線文系の文様様式・器形や石鏃の身部の断面が菱形を帯びる凹基A2c・B2c・C1cは、漢江流域より、大同江流域と類似している。従って、中期以後に見られる錦江流域の初期農耕は、漢江流域から広がってきたというより、大同江流域から京畿湾を沿って錦江流域に広がった可能性が高い。

それと共に、中期以後の大同江流域と漢江流域では、石器組成や石鏃において、前期の様相とは異なる点がかがえる。特に、中期以後の大同江流域においては、耕具の割合が減少し後期には出土例が見られなくなる。これに比べ、漁撈具の割合は高くなり、後期には石器組成の80%以上を占めるようになる。それにもかかわらず、後期になっても依然として植物質食料加工具の磨盤・磨棒は出土しており、後期の南京31号住居跡からはアワが多量に出土している。それは、大同江流域の中期以後の生業が漁撈に比重を置いていながら、農耕も続いていた可能性がある。しかし本稿ではその農耕形態について明確にすることはできなかった。また中期には、韓半島東北地方の特徴的な遺物で知られている、柳葉形石鏃（平基D）や肩がある土掘具の凸字形鏃（ゴンベゲンイ）や鹿角製掘棒などが出現している。従って、中期以後の大同江流域の様相を明らかにするためには、東北地方との関係を考える上で論じるべきであると思われ、今後の課題として残す。

終りに

韓半島中西部地域の農耕は、擦り切り技法の石鏃に伴う農耕具の割合から、大同江流域と漢江流域で初期農耕が始まり、中期以後は大同江流域から錦江流域に広がっていったことが認められた。そして、中期以後の中西部地域では強い地域性が認められた。このように本稿では二つの点からいくつかの問題点がかがえる。一つは、中西部地域における初期農耕の拡散はどのような形態であったのかという問題である。自然環境の条件を含めた初期農耕民の最適農耕地を巡る移動であるのか、植物質食料の間接的な獲得から直接的な獲得へという、より積極的な生業技術を受け入れる過程における、道具だけの広がりであるのかを考えるべきである。もう一つは、地域性が顕著となる要因は何であるかという問題である。立地環境に適応した結果、気候環境変化に適応した結果、周辺地域の影響による集団の移動など、様々な要因を考えるべきである。従って、初期農耕をより明確に理解するためには、農耕を社会・環境という視点から検討しなければならない。

謝辞：本論を草するにあたって甲元眞之先生、安在皓先生、木下尚子先生、姜賢淑先生、小畑弘己先生、杉井健先生、大坪志子先生にはあたたかいご指導や助言をいただきました。記して感謝いたします。また、遺物観察を欣快にご承諾くださった韓国の国立文化財研究所、慶成大学博物館、啓明大学博物館、東国大学慶州 campus 博物館・埋蔵文化財研究所、東三洞貝塚展示館、東亜大学博物館、東儀大学博物館、釜山大学博物館、釜山博物館、ソウル大学博物館、円光大学考古美術史学科、朝鮮大学博物館にも感謝いたします。さらに研究室の同輩である芝康二郎氏や後輩の南健太郎氏、神川めぐみ氏からは研究に対する多くの助言や日本語の修正を受けました。この他にも様々な方々にお世話になりました。有難うございました。

参考文献

<韓国>

報告書

- 金用珩・徐国泰、「西浦項原始遺跡発掘報告」『考古民俗論文集』4、社会科学出版社1972
- 金用珩・石光濬、『南京遺跡に関する研究』科学百科事典出版社、1984
- 金用男、「弓山文化に関する研究」『考古民俗論文集8』科学・百科事典出版社、1983
- 朴淳發・林尚澤 他、『駕島貝塚』忠南大學校博物館第22輯、2001
- 朴喜顯 他、『永宗島松山先史遺跡』ソウル私立大學校博物館、1996
- 白弘基 他、『襄陽 地境里 住居址』江陵大學校博物館 學術叢書 36冊、江陵大學校博物館、2002
- 宋滿榮 他、『連川 三巨里遺跡』京畿道博物館 遺蹟調査報告 第9冊、京畿道博物館、2002
- 申鍾煥、『清原 雙清里 住居址』學術調査報告書 第3冊、國立清州博物館、1993
- 安德任 他、『大竹里遺跡』韓西大學校博物館叢書第3輯、韓西大學校博物館、2001
- 安承摸・李永徳・金大聖『鎮安 龍潭ダム 水没地区内 文化遺蹟 發掘調査報告書XⅢガルモリ遺跡』湖南文化財研究院學術調査報告第13冊、(財)湖南文化財研究院、2003
- 尹根一・曹美順・李相俊、『小延坪島貝塚』國立文化財研究所、2002
- 尹炯元 他、『岩寺洞Ⅱ』國立博物館 古蹟調査報告 第三十冊、國立中央博物館、1999
- 李起吉 他、『鎮安ジングヌル先史遺跡』第1冊：新石器と青銅器時代の暮らし、朝鮮大學校博物館・鎮安郡・韓国水資源公私、2005
- 李康承・朴淳發 他、『屯山—先史遺蹟發掘調査報告書一』忠南大學校博物館叢書 第12輯、忠南大學校博物館、1995
- 李相俊・曹美順・金正延、『延坪 毛伊島 貝塚』國立文化財研究所、2003
- 李俊貞、「狩獵・採集經濟から農耕への転移過程に対する理論的考察」『嶺南考古學報』28、嶺南考古学会、2001
- 任孝宰 他、『烏耳島ガウンデサルマク貝塚』ソウル大學校博物館、2001
- 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所、『弓山原始遺跡發掘報告』遺跡發掘報告第2集、社会科学院出版社、1957
- 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所、『智塔里原始遺跡發掘報告』遺跡發掘報告第8集、社会科学院出版社、1961
- 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学民俗学研究所、『金灘里原始遺跡發掘報告』遺跡發掘報告第10集、社会科学院出版社、1964
- 中央博物館、『岩寺洞』國立博物館 古蹟調査報告 第二十六冊、國立中央博物館、1994

- 崔完奎・金鐘文・李永徳、『ソレ島（I）』馬韓・百濟文化研究所遺蹟調査報告 第49冊、博物館學術叢書 12、圓光大學校 馬韓・百濟文化研究所、圓光大學校博物館、2002
- 韓昌均 他、『沃川 大川里 新石器遺跡』韓南大學校中央博物館叢書16、韓南大學校中央博物館、2003 論文
- 田中聰一、『韓国中・南部地方新石器時代土器文化研究』文学博士学位論文、東亜大学校大学院 2000
- 宋銀淑、『韓国櫛目文土器文化の拡散過程研究』ソウル大学校大学院文学博士学位論文、2002
- 安承模、「遼西地方の先史時代石製耕具」『三佛金元龍教授停年退任記念論叢—考古学偏』三佛金元龍教授 停年退任記念論叢発行委員会、1987、717～732頁
- 安承模、「栽培穀物でみた東アジアの新石器時代農耕」『東アジアの新石器文化』文化財管理局文化財研究所、1994、3～25頁
- 李永徳、『群山ソレ島遺跡の新石器時代土器研究』檀国大学校大学院考古美術史専攻修士學位論文、2001
- 李賢恵、「韓国農耕技術発展の諸時期」『韓国史時代区分論』소학、1995
- 李賢恵、『韓国古代の生産と交易』一潮閣、1998
- 林尚澤、「中西部新石器時代石器に関する初歩的検討 I—石器組成を中心に—」『韓国新石器研究』創刊号、2001、57～81頁
- 池健吉・安承模、「韓半島先史時代出土穀類と農具」『韓国の農耕文化』京畿大學出版部、1983、53～101 頁
- 韓永熙、「韓半島中西部地方の新石器文化」『韓国考古学報』5、韓国考古学会、1983
- 韓永熙、「新石器時代中・西部地方の土器文化の再認識」『韓国の農耕文化』5、1996

<日本>

論文

- 大貫静夫、「極東における雑穀農耕文化の展開」『世界の考古学⑨ 東北アジアの考古学』、同成社、1998、283頁
- 甲元眞之、「朝鮮の初期農耕文化」『考古学研究』第20巻第1号、考古学研究会、1973、71～89頁
- 甲元眞之、「東北アジアの石製農具」『古代文化』、財団法人古代学協会、1989、183～205頁
- 小林康男、「縄文時代生産活動の在り方（一）—特に中部地方における縄文時代前期・中期の石器組成を中心として—」『信濃』第26巻第12号、信濃史学会、1974、1015～1025頁
- 小林康男、「縄文時代生産活動の在り方（二）—特に中部地方における縄文時代前期・中期の石器組成を中心として—」『信濃』第27巻第2号、信濃史学会、1975、184～199頁
- 小林康男、「縄文時代生産活動の在り方（三）—特に中部地方における縄文時代前期・中期の石器組成を中心として—」『信濃』第27巻第4号、信濃史学会、1975、311～328頁
- 小林康男、「縄文時代生産活動の在り方（四）—特に中部地方における縄文時代前期・中期の石器組成を中心として—」『信濃』第27巻第5号、信濃史学会、1975、441～453頁
- 小林康男、「組成論」『縄文文化の研究』7 道具と技術、雄山閣出版株式会社、1983、16～27頁
- 桜井準也、「石器組成の分析と考古学的地域について—関東地方縄文時代中期の住居址出土資料を中心に—」『史学』第54巻第1号、三田史学会、1984
- 酒井龍一、「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『文化財学報』第4集、奈良大学文学部文化財学科、1986、19～37頁
- 鈴木道之助、「石鏃」『縄文文化の研究』7 道具と技術、雄山閣出版株式会社、1983、88～95頁
- 鈴木道之助、『図録 石器入門事典 縄文』、柏書房、1991

- 敦賀啓一郎、「石器組成分析による縄文時代生産活動の復元—九州東北部地域を中心に—」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集、河瀬正利先生退官記念事業会、2004、245～258頁
- 戸沢充則、「総論—石器研究の視点と方法—」『縄文文化の研究』7 道具と技術、雄山閣出版株式会社、1983、3～13頁
- 富永明子、「附：朝鮮半島新石器時代文献目録」『シンポジウム 海峡を越えて—一原の辻以前の先史時代の人と交流—』、龍田考古会、2001、193～234頁
- 羽生淳子、「縄文人の定住度（上）」『古代文化』第52巻第2号、財団法人古代学協会、2000
- 宮本一夫、「朝鮮有文土器の 編年と地域性」『朝鮮學報』121、1986、1～48頁
- 宮本一夫、「朝鮮半島新石器時代の農耕化と縄文農耕」、『古代文化』、7、2003、357～372頁
- 米倉秀紀、「縄文時代早期の生業と集団行動」『文学部論叢』第13号史学篇、熊本大学文学会、1984、1～28頁

A study of Neolithic agriculture in Korea Peninsula
— Analysis of the Arrowheads and Lithic assemblage
in the Middle-western Korean Peninsula —

Kim SungWook

The end of this paper is to considered on the existence and Diffusion of the Neolithic agriculture in the middle-western Korean Peninsula. At first, I defined what is 'agriculture'. We can clarify agriculture in neolithic Korea with concrete examination about farming tools and other artifacts but also manufacturing technology and its diffusion. To estimate diffusion of early agriculture of middle-western area region, excavated artifacts in the dwelling site of Jitap-ri II area is worthy of notice. That was agricultural implements such as oval plow-shares, sickle harvesting tools and plant grinding tools as saddle quern · grinding pestle and the double-tail wing arrowheads whetted with major axis to connect with shaft.

I reexamined mainly the analysis of the arrowheads and lithic assemblage in the middle-western Korean peninsula. In The first term, I stage-type of the double-tail wing arrowheads and farming tools and grains were provided in dwelling site of Jitap-ri, Deadong-river area. And then Han-river area also began to take on same aspect. In the middle term, II stage-type of the double-tail wing arrowheads and farming tools were found out in the Geum-river area and the river mouth, where they never be found out before. This diffusion tendency was kept on till the latter term and III stage-type of the double-tail wing arrowheads and agricultural implements were diffused in the Geum-river area. Therefore it was demonstrated that agriculture of middle-western area was diffused from Deadong-river area to Geum-river area.